

SEEDS



No.234 春号
2017 /

自然特集
知床のシヤチ — ナツ多き海の王者 —
活動レポート
ヒグマ管理計画
ヒグマと人がうまくやっけていくための道標

知床・人・インタビュー第30回
中山芳子さん

スタッフの休日 第1回
きのこ狩り

知床財団購買部
知床の「今治ガーゼハンカチ」

ヒグマ管理計画

～ヒグマと人がうまくやっていくための道標～

文・増田泰 事務局長



世 界的に見ても、ヒグマの高密度生息地である知床。にもかかわらず、知床のヒグマ管理に関して、現場では経験に基づいた一定の対応方針があったものの、明文化されたものは長らくありませんでした。そのため、どのような方針に基づいて現場対応が行われたのか、対外的に説明する上でも、その明文化が必要でした。

このような背景の中で、2012年初めて当時の現場の方針をまとめた「知床半島ヒグマ保護管理方針」が完成、そして今年4月からはその後5年間の経過を反映した「知床半島ヒグマ管理計画」がスタートしています。ここではその内容を紹介します。

ヒグマ管理計画は誰が作っているの？

世界自然遺産の管理機関である環境省や林野庁、北海道、そして知床国立公園と知床世界自然遺産地域を抱える斜里町と羅臼町に、標津町を加えた3町です。

これまでオプザーバーだった標津町は今回から正式に計画に加わりました。その理由は知床に生息するヒグマ、特にオスの行動範囲が知床半島の基部にまで及ぶためです。

知床財団はどのように計画に関わっているの？

知床財団は長年知床国立公園内外のヒグマ管理業務を環境省、斜里町、羅臼町から請け負っているため、計画策定の際には現場の立場でその内容について意見を出しました。

ヒグマや人（地域住民・観光客）と向き合う機会が最も多いのは私たち知床財団スタッフのため、この新しい計画に基づいたヒグマ対

策をこれから実際に行っていくことになりま。

また、独自に生態調査や対策、地元学校でのヒグマ学習の開催など普及啓発の活動も行っています。

2017年からの計画は今までと何が違うの？

過去5年間の課題は、地域住民や観光客の行動が原因で発生した危険事例が未だに多いことでした。そのため、新たに人側を守るべきルールや注意すべき点などを明示し、特に利用者が多く、ヒグマに対してできることが限られる国立公園内の道路沿いなどを「特定管理地」として重点的に人側への対策を行うこととしました。

その他、人慣れの進んだクマは明確に区別して対策を行うことなども新たに盛り込まれました。

ヒグマと人のトラブル事情



ヒグマに人間の食べ物を投げ与える観光客

羅臼町はこんな町
 ・人口 5,294 人（2017 年 3 月）
 ・漁業の町
 ・学校付近や海岸線に沿って電気柵を一部設置している



電気柵が張られた羅臼の海岸線の昆布干し場



住宅地に出没したヒグマを追い払う知床財団スタッフ

斜里町ウトロはこんな町

・人口 1,156 人（2017 年 3 月）
 ・漁業、農業、観光の町
 ・市街地をぐるっと電気柵で囲んでいる



電気柵に囲まれた町、ウトロ



ヒグマに近寄って撮影するカメラマン

斜里町市街地



ヒグマに食い荒らされたビート畑

標津町

こんな事例も…



住宅周囲のシカ侵入防止網に絡まったシカを食べるヒグマ



ヒグマに網を破られた魚干し場



昆布番屋近くの道路を歩くヒグマの親子

ヒグマ管理計画、その中身は？

対ヒグマのルール

ヒグマに対しては、出没した場所やその行動をレベル分けしてルールを作っています。例えば、人の生活圏に近い場所での出没ではヒグマに対して厳しい対処を行い、逆に登山道など山の中での出

没については、市街地よりもヒグマの存在を尊重する対応基準にしています。計画がまだ存在しなかった頃は、一定の基準はあるものの、対応現場でその都度悩みがありました。管理計画ができたことで、より詳細な判断基準がある程度示され、対応現場での迷いを解消する手助けになっています。

対人のルール

2017年から新しくなりました！

ヒグマ対応は実は「人対応」とも言えます。言葉の通じないヒグマに対して何かを施すよりも、人間の行動をコントロールする方がはるかに効果的だからです。今回改めて整理された計画の中では、知床に住む人、訪れる人に対してルールを明示しています。たとえば…

- ◎ヒグマの存在を常に意識する
- ◎ヒグマに会っても速やかに通り過ぎる（車道沿線）
- ◎ヒグマを誘引するような食物・ゴミの管理を徹底する

相手は野生動物。性格や反応も色々です。ルール上の基準はありますが、現場では、その場の状況にあわせて臨機応変に対応するための経験と判断力が常に求められます。



増田

今まで暗黙の了解のように思われていたことも計画の中しっかりと記載されています。さらに人の行動の程度によっては、法律や条例に基づき罰せられることもあります。



上：簡易的な電気柵で囲まれた住宅地の魚干し場
右：登山道に設置されたヒグマ対策用の食料保管庫（フードロッカー）

登山道（ゾーン2）に出没した場合



段階0 警戒心が高く人目につきにくい個体
人為的食べ物は食べていない
➡ 経過観察



段階1 警戒心が低く人目につきやすい個体
人為的食べ物は食べていない
➡ 経過観察 or 誘引物除去・追い払い



段階2 人為的食べ物を食べた個体
➡ 捕獲 or 追い払い



段階3 人につきまとう、攻撃する個体
➡ 捕獲

ヒグマ管理計画応援ツール

管理計画は出来上がっただけではダメで、その書面が活きていくように現場の活動が進んでいかなければなりません。知床財団では、ヒグマに対する直接的な追い払い業務のほかにも、人の行動への働きかけとしてゴミ箱開発に関わったり、地元の学校での授業としてクマ学習を毎年実施したりしています。

ヒグマ学習



知床のウトロと羅臼では子どもの時に横断歩道の渡り方を習うように、ヒグマについても学びます。知床財団は毎年地元の小学校、中学校、高校でヒグマの生態やヒグマにあっつてしまった時の対処法などの授業を実施しています。

とれんベア



ヒグマが暮らす町で「ゴミ」の管理は必須です。このとれんベアはシティ環境株式会社（網走市）が製作、販売しているもので製作には知床財団がアドバイザーとして関わりました。旭山動物園のヒグマにも協力してもらい、耐久性は実証済み！

ヒグマと人がともに

生きる場所、知床

計画に書かれたことの多くは、既にこれまで私たちが取り組んできたこと、呼びかけてきたこととです。しかしその内容が世界遺産を管理する国や北海道の策定した計画に明文化されたことの意義は大きいと思います。そこに書かれたことは現時点では理想に過ぎないかもしれませんが、5年後には実現できるかもしれません。たとえ5年後が無理でも10年後には達成できるかもしれません。この計画は知床の進むべき道を示す道標です。

クマに対する知識や情報の提供、クマを引き付ける食べ物やゴミの管理などの徹底が、人とクマの距離を保ち、事故の予防につながることを今後も地道に訴えていきたいと思えます。人は、ヒグマとの軋轢の原因を安易にヒグマに求めがちです。

が、背後に人側のふるまいが原因として隠れていないのか、もの言わぬヒグマに代わって探るのも、私たちの役目です。人にとってもヒグマにとっても不幸な結末を生まないために、客観的視点を忘れないよう心掛けながら、現場の最前線でもこれからもヒグマと向き合っていきたいと思えます。

ヒグマ管理計画は全頁皆さんにご覧いただくことができます。



<http://www.shiretoko.or.jp/higuma/higuma5.html>

電気柵

電気柵はヒグマと人の緩やかな境界線を作るのに役立ちます。知床財団は、ウトロの町をぐるりと囲んでいる電気柵や、羅臼で昆布漁が営まれている海岸線沿いの電気柵などのメンテナンスを実施しています。



旭山動物園での実験の様子